

---

# マム～もう一つの私たち～

シリウス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「マム～もう一つの私たち」

### 【Zコード】

N4366D

### 【作者名】

シリウス

### 【あらすじ】

これは、以前わたしの頭の中にはあった物を小説にしたものですが、一応、ペルンスのサブストーリーです。時間的には、本編よりずっと未来になります。地球人がようやく知的生命体のいる惑星を発見した。そこにはうさぎのような生物が町を作っていた。

西暦2556年。人類はついに地球外知的生命体の存在が期待できる惑星を発見した。その星は青とも紫とも言えない海をもつて緑に覆われていた。それだけではない、恒星の光が当たらない夜の部分から光を放っていることも確認したのだ。

人類が宇宙にて550年ほど立つてようやく我々以外の知的生命体にあえるのだ。

本当にがかつたと思う。

私は仲間の知らせで人工冬眠から覚めた時から興奮しばなしだった。そして、ついにその惑星を間近に見た。あまりの美しさに足が震えた。青い海があり陸には緑がある。そして白い大気が巨大な玉を取り巻いていた。暗い宇宙にぽつりと浮かぶその星はまさに言葉にできない美しさだつた。私たちの乗った宇宙船はどんどん惑星に近づいていった。

「いいよ着陸ですね」

仲間が私にいつた。12人しか宇宙船には乗つていなかつたがみんな目をときめかせて着陸の瞬間を待つていた。一体どんな生物がいるのだろうか、本当に知的生命体はいるのだろうかさまざま期待を背負いながら宇宙船は大気圏へと入つた。大気圏に入ったからは、ここはもう宇宙じやないんだ。もうこの星についたのだ。

宇宙船は森の木が途切れ空間になつてているところに着陸した。空はまだ日が高いところにあるのにピンクともオレンジともいえない色をしていた。また空にはクラゲのような傘をもつた透明な生き物が浮かんでいて木も地球のものより貧弱そうに見えた。

大気の成分は奇跡的に地球に似ていて、重力は地球の8分の1。

1日の平均気温は5°。

私たちは、念のため防護服を着て外に出た。そして万が一に備えて銃ももつてきた。

重力が希薄なせいか普通に歩くよりジャンプして歩いたほうが、早く移動できた。

しばらく歩くと少し開けた場所についた。

目の前を見ると町のように家のたつた空間が広がっていた。また、一番奥には城のように立派な建物まであった。だが、どれも私たち人間がかるうじて入れるほどの大きさの入り口しかなく、家の大きさも人間の家と比べて一回りほど小さかった。そして町には人間とは違った生き物が歩いていた。

耳が長くうさぎのようだが、足は短く一足歩行をしていた。全身厚い毛皮で覆われ、服もまとっている。そして、お互いその生きものどうしは、言葉のようなものでコミュニケーションをとつていた。

私たちはその光景を見たとき歓喜のあまり抱き合つた。言葉をしゃべつて家たてて、店のようなものもある。これは紛れもなく知的命体だ。

私たちはその生き物を詳しく知るため1匹をサンプルとして持ち帰ろうとした。その時だった。

「やめなさい！」

人間の言葉で誰かがそういった。

だが、その声に覚えはなく、ふわふわした人間の声とは違う声だつた。

そして、ちょっと下を見るときらびやかな豪華な服をきたその生き物が立っていた。仲間はそつと捕まえたその生き物を地面におろした。

「あなたたちは地球人よね。あなたたちのことはずつと昔から知っているわ」

私たちの前にいる豪華な服をきたその生き物がいった。

「あなたたちがここにくるのも私たちは知っていました。」「私

たちは何があこつたのかわからない状態になつていて。見知らぬ生き物から話しかけられて、しかも地球の言葉で。しかも、私たちがここにくることを知つていただなんて？！

「まあ、そのうちわかるわ」

私たちが驚いたような顔をしていると、生き物はそういった。

「あ、あなたたちはなんという生き物なんですか？」仲間の1人が勇気を出していった。

「『マム』って昔からいわれてるわね

そして、惑星の名前は『トロコフオア』

でも、呼び方なんて関係ないわ～どうせ深い意味はないんだしまあ、ゆっくり話しましょ」

マムはそういうと一瞬のうちに全く別の場所へと移動した。私たちはさらに驚いた。目前には私たちが普通に入れる大きさの入り口のある建物があった。

気が付くと夕方になつており、ピンク色だった空はさらに濃い色にそまつっていた。

「ここに…入るんですけど…」

「そうよ、話すことなんかいつぱいあるから」

建物の中も私たち人間が普通に通れるほどの広さがあり、さつきの町の建物とは明らかに違つていた。私たちは、マムに案内される部屋へと入つた。部屋につくまでもたくさんママたちとすれ違つた。

部屋の中には、また私たち人間が座るにちょうどいい椅子と机があつた。なにか明らかに私たちがくることがわかつて、そのために作られたような建物だ。

「そこに、腰をかけなさい」

いわれるがままに横一列になつて12人が座りマムの方を向いた。

「わたしは、この星のあなたたちの星ふうにいえば、王と言えるかもしれない。テル・ゼイミーよ」

「なあ、ゼイミーさん

この建物はさつきの町の建物と違つて明らかに人間サイズに作られているんだけど、これは、俺たちのために作ったのかよ？」

「さあね、そのうちわかるわ」

マムのゼイミーはさらっと答えた。

「も、～なにがそのうちわかるわだよ全然わかんねえよ」

仲間の1人が身を乗り出しながら怒鳴った。どうやら突然すぎる変化にノイローゼになってしまっているようだ。

「だいたい、なんでおまえなんかのいいなりに」

暴れる彼を彼の両隣の人は必死で押された。

「だから、いつまでたつても下等なのよ」

ゼイミーがぼそつといった。

「な、に、～」

「こら～落ち着いて」

両隣の人はさらに強く押された。

「行つておきますけど、地球の人間はもう絶滅したわよ」

ゼイミーがそういうとみんな固まつた。さつきまであはれてた彼も一緒に。

「そんなん…」

「あなたたちが地球を出るときもかなり地球の環境は汚染されたでしょ

地球の平均気温はわずか100年で14・5度もあがつた  
多くのかつて熱帯雨林だったところは砂漠化し多くの生物が絶滅していった

地球の温度の上昇に伴つて多くの地球上の水はとけ、氷の大陸とも言われた南極はすでに緑に覆われる大陸に変わり、ツンドラ地帯や永久凍土に眠つていたメタンは大気中に放たれて温暖化に拍車を掛けた

また、氷がとけたことにより多くの氷に閉じ込められていたウイルスが眠りから覚め、新ウイルスに対して抗体のない当時の生物は大きな打撃を受けた

それは、人間も例外なく…

人間は自業自得だからいいがほかの生物はたまつたものではない  
でも、こういう環境の変化に一番弱いのも実は温室の中で何不自由  
なく育つた人間なんだから  
あつけないわよね

産業革命がはじまってからわずか450年ほどで人間は滅んでしま  
つた

明らかに人間の産業革命は人間という種の寿命を縮めたと思うわ  
とは、言つてももう種としてはかなり年寄りだつたけど…  
でも、あと5000年は多く生きられたと思うのに

ゼイミーはさらつと地球人類の最後について語つた。

「あ、でもあなたたち12人がまだいるわね  
「ゼイミーさん今のことばは本当なんですか？」

「ああ本当さ」

わたしたちはそれでも人類が絶滅したなんて信用できなかつた。  
あたりまえだよ。全く見知らぬ生き物にそんな、重いこといわれて  
信じられるほうがおかしい。

「ゼイミーつていつたつけ

なんであなたはそんなことを知つているの？

私にはいまいち信用できないのだが…」

するとゼイミーは私たちの前に惑星の姿を立体映像で映し出した。  
その映像は物凄くリアルにできていて、まさにそのままずっと縮小  
したような美しさだつた。

でもそれにみとれている余裕はなかつた。海の上に浮かぶ大陸は  
ほとんど茶色から灰色のような色をしていて、南極だけが緑色をし  
ていた。

「かわいそだが、これが現在の地球の姿だよ

ゼイミーは少し悲しい表情を浮かべて言つた。

かすかに名残のあるその大陸の形からもはや受け入れるしかなか  
つた。中には泣きだすものまでいた。

「じゃあ、どうしてあなたたちはこんなに離れた地球のことを知っているんですか？」

わたしは、問いかけた。その問い掛けにゼイマーは一呼吸おいて答えた

「私たちマムはあなたたちが機械文明を築くずっとまえから高い文明をもっていました」

機械文明は怖いもので遺伝子の変化で能力を手に入れていくよりはるかにリスクが少ないし時間もかからない  
だから、恐ろしい勢いでさまざまなことができるようになつていふそこに満足というものはないからほおつておけば、いくらでも技術は発達する

でもそんなときに忘れがちなのは、環境への影響、ほかの生物に対する影響よ

あたかも、惑星が一つのいわゆる知的生物だけのもののように勘違いして一人勝になつてしまつ

でも、実際生物の生態系は一つの大きな生き物のように連鎖しあつてゐる

小さな歪みならすぐ修正できるけど、おおきな歪みはそつはいかない

それを考えないで自分の利益だけで技術を発達させていつたらいつかは崩壊することなんてよく考えればわかることよ  
このトロコフオアも大昔はマムが支配する惑星だった

でも、ある時気付いたの

このままでは私たちも含め全トロコフオアの生物が絶滅してしまうつて

それから、私たちは技術を環境に向けたの

さつきもいったしななたちもよくわかつてるとおもうけど技術の進化はすごいわ

ひとたび自然のほうに目を向けたら自然環境は一氣によくなるわ

そうなんだ…

たしかにそうだ自然環境をよくするほうに科学を向ければ驚くほど早く環境を整えることができたかもしない でも、現実はそれができないで地球人類は絶滅してしまった。

でも、どうしてそこまでわかつていて私たちを助けてはくれなかつたのだろうか？

「ゼイミーさん

じゃあ、そこまで私たちの星のことを知つていて未来もわかつていながら地球を助けてくれなかつたんですか？」

私は、思ったことを素直に聞いた。

すると、ゼイミーはまた悲しい表情を浮かべて言った。  
「私たちだって助けたかったわよ、同じ天の川銀河の一員としてでも、それはできない

ましてや、己が絶対だと勝ち誇つているときは何を言つて聞かないわ今あなたたちだってなかなか信用できなかつたですから、普通は自分たちで気付くしかないの」

たしかに言われて見ればそうだ。宇宙からいきなりきて地球の言葉をしゃべる宇宙人からこのままで絶滅するからやめなさいなんて言われても信用できるわけがない。

でも、私はゼイミーの言葉に少し引っ掛けた。

ゼイミーは普通は自分たちで気付くしかないって言つた。これは助けたことがあるって言つふうに聞こえた。

「ゼイミーさん

今普通は自分たちで気付くしかないって言いましたよね？

それは一回でも助けたことがあるって言つことですか？」

ゼイミーは少しどキッとしたように見えたが、しばらくして答へはじめた。

「私たちマムはこの星系の第4惑星のトロコフオアに住んでいるでも、もう一つ内側のセイピという惑星にも知的生物が住んでいる私たちは驚いた。この星系には知的生命の住む惑星が2つもある

なんて！

すると、ゼイミーは私たちを屋上へと連れていった。むづ、すつかり夜になつていて空には大小2つの丸い立派な衛星が浮かんでいた。

ゼイミーは屋上にあがるとひとときわ明るく輝く青白い星を指差した。

「あれが、セイピよ」

私たちは、息を飲んだ。

「そして昔、あの惑星のペルンスと言つ国に私たちの祖先いつて科学技術を伝えた

最初は平和的に使つていたわ

でも、自分たちでもそれを進歩させていつて大戦争になつたことがあるの

私たちの伝えた技術は戦争の道具にされ多くの国を占領し、惑星の環境もどんどん汚染されていった

そんな時私たちの祖先は自分たちでまいた種なんだからなんとかしなくては！という思いから間違つた技術の乱用を止めさせた…

今はもうとっくにいい惑星になつているわよ」

そんなことがあったのか…

やつぱりどこの惑星でも科学の発達に伴う環境破壊に苦しんでいるんだなあ。そして、地球がそうだったように発達した科学は戦争の道具に使われてしまふんだなあ。

でも、すごい。星系に2つの知的生命がいるなんて！

「で、その惑星の知的生命はどんな姿をしているんですか？」

「それが、おまえらとあまりかわらない姿をしているよ。たぶん見分けなんてよくみてもつかないんじゃないかな？」

「えー」

私たちは唖然とした。

こんなに離れているのにほとんど変わらない姿の生き物がいるの？

「おまえらのさつきの質問に答えてあげよう

この建物があまえたちのために作つた建物かを  
答えははつきり言つてNO

でも、建物や机椅子があまえたちのサイズに作られているのは、かつてここがセイピ人とマムが一緒に暮らしている町だつたからいまはこの町は外交だけでしか使われていなければ、今でも共同都市はこのトロコフオアにたくさんあるわよ

もう、ここまで驚くとただ啞然とするしかなかつた。それと同時に地球人の宇宙に対する小ささを感じた。

ゼイミーの話を聞くと本当にただ頷くことしかできないんだもの。

「そうだ

あなたたちセイピに行つてみなさいよ」いつすつとくらしやすいから

それに、昔地球人が住んでいたという話もきくわ

地球人が住んでいたと聞いてももう驚かなかつた。普通なら驚くはずだと思うが驚けなかつた。ただその惑星にいきたいと思つただけだつた。

「じゃ、決まりね

あなたたちを連れていくわあとこれを渡しておくわ

それは、耳栓のようなものと丸いたまのようなものだつた。

「それは翻訳機よ

まずスイッチをいれてこれを耳に入れればまわりの言葉が地球の言葉に翻訳されて丸いのが口の前にいくからしゃべると相手の言葉になつてでていくわ

着けた瞬間からまわりのマムたちの声が言葉として聞き取れるようになった。

「わたしは今自分たちの言葉でしゃべつてるけど聞き取れますか？」  
ゼイミーが言った。

「はい」

「じゃ、いくわよ」

その後私たちは宇宙船に乗りセイピへ向かつた。

いつたいどんな生き物が住んでいるのかなどいろいろな期待をふくらませた。でも、その反面地球人類が絶滅してしまったことに戸惑いを隠せなかつた。

地球の人類は絶滅してしまったのに私たちだけが生きているなんて少し滑稽なことだと私は思った。これで12人がセイピに行つてみんな死んでしまつたら、これで本当にこの世から人類はいなくなつる。でもだからこそ生きなければとも私は思った。

目の前にまた、青く美しい星が現われた。地球でキリストが生まれて2556年たつた。今この世で地球人はわずか12人です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4366d/>

マム～もう一つの私たち～

2011年1月19日02時25分発行